熊野 祈りの風景の記憶

取材・文 中上 紀

熊野の中で、いつも風景がたゆたう。

本年注に向かってまっかりと口を開けたような洪水に打ち寄せる波の音。蛇行する巨大な川の音。たびに色を変えていく樹、清澄たる滝から流れる清涼な飛沫が作る水の世界。そして、深く深くにまで沈む静かな山の緑のさわめき。耳れかかる濃密なカーテンでふと聞こえる上ガニの声。苔むした石のひんやりとした感触。山と大地のイメージ。それらが、交互に現れては消え、配慮や、遠慮の迷路や、未来への期待や不安と混じりあい溶け合っていく。

眠りの最中にそんな映像に包まれる夜を、幾晩も過ごした。

夢に出てくる男は、わが父の故郷であるこの熊野だ。世界のどこにいようが、ひとたび眠りに陥れば、眠り通らされた盲目の男がそこにいる。そして、熱く濃い熊野への思いが溢れ出し私の夢を支配する。

この世に生を受けたその瞬間から、私は熊野のほうを向いてきたと思っている。幼い頃は潜在的にではあるにしろ、父が熊野を故郷とする人であることを誇りに思っていた。

父が熊野を故郷とする人であることを誇りに思っていた。

父が熊野を故郷とする人であることを誇りに思っていた。

今でも熊野には、そこに人と新信あるいはそこに世界を見ている人がいる。好奇好きな私にとって、それが私の中の熊野のベース音になっている。

私たちの生業ようになったのはもう十年近く前になる。

当年時代に訪れたアジアの田舎に、私はこしようもないほどの感銘を受けた。文化や名所旧跡ももちろん興味深かったが、何よりも、土地の人々の旅人に対する素朴な応接ぶり。眼いっぱの命あるものを慈しむ心や祈りの風習が、それぞれの世界観を物語として体内に刻まれていったのだった。同時にある種の懐かしさが私を包んでいた。以来、取りつかれた様にアジアを旅するようになったのだが、ふと気づくと、熊野のことを思っている自分がそこにいた。ものを書くようになったのと、ノクノクと身体のどこかで波打つ熊野の存在をはっきりと意識するようになったのも、同時期のことである。

熊野というと、ただ、古来より”異界の熊野語“と呼ばれる独と り、人々を熊野へと行ける信仰の地だけあって、訪れる者に対して優しく重大なアジア的性質を持っている。

意原からもっとこころ清く、深い山々と海に囲まれて言葉や今もちょっとやそっとでは入り難いような土地であるにもかかわらず、熊野に外国からの客や観光者が多いのは、外からの者に対して圧倒的に開かれていないからではあるまいか。古くは熊野に集ってきまざまな民族がこの半島の密閉に流れ着いたはずで、修験上陸伝説などがあるのも、そういう風土ゆえであろう。

神様も異大である。一月に神倉山で行われる火祭りは、上り子になる人は男でなければ年齢、出身地、人種の制限はない。女性も祭りの側面から支えるという重大な役割を果たしている。何というでも山の神様は女性だ。それに、かつて熊野語にやってきた和歌山部が奉宮の近くで月のものが始まってしまい、泣く泣く参詣の途を諦めようとしたエピソードが、美貌に満ちた熊野が現れ、これを受け入れたという話もある。熊野の神は潔癖、不浄を嫌びはしない。それどころか、不浄の者、弱い者を守り救う神なのである。

何者をも拒まない土地の性格は、熊野は外の世界に対してもオープンだ。他所人々が出て行くのは当然の成り行きだった。ただ、ここは新宮に関して言えば、農業も漁業も難しい地形が、ちょっと前までは貧困から出稼ぎに行くのは当たり前のことだったが、その行く先は海外の町というよりは、北海道のような遠い場所だった。だから、港を離れてサンフランシスコやホノルルの口に乗せて移り住んだ者もいると聞いた。

遠く行くことに対して、この土地の人々にはさほど抵抗がなかったらしい。那智湾沿から漁船で沖合に出た十人くらいの漁師たちは、青い海の向こうにはきっと素晴らしいものが、輝く豊かさがあるものだと思っていた。この土地の人々の意識の中には、遠くへ行くことに対する憧れがあったのかもしれない。

意原というと、私の母は古座川の河口に近い、向こうに大島を眺め、そのたびに出れば沖の青い海の向こうに、沖の中に浮かぶ小さな島が、そこに住む人々が、思いを馳せながら分かれ、流れていった。石垣の間に咲いた小さな花だけを、大切に胸の奥に抱いて。

彼女が、古座川の河口に立ち、向こうに大島を眺め、そのたびに出れば”沖に出る”と言われた場所でもあるこの国を、”海の国”と言ってもいいのかもしれない。

熊野とは沙の青い海と、緑の山々が、ぴったりと寄り添う場所である。

熊野の中心地、新宮市から川を越えて三重県側に入り、海岸近くを走るドライブをしたことがある。熊野市新鹿町に半年ほど暮らし、私や妹はそこの小学校に通っていた。考えてみれば、私自身がすでに”熊野人“だったのである。

私は電校から米国に留学し、以来十年以上を日本で暮らしていなかったのだが、休暇で帰国するたびに、熊野へ行った。那智勝浦町には、かつて父が社長として使い、熊野での本拠地にしていた古い マンションがある。そこには当時、中上健次という作家と、一人の人間として生涯を共にした、一人の女性がいた。その地にたどり着けた頃だった。私にとって熊野は、まさに、母なる存在であった。

私たち家族は東京で生活していたが、夏になると、実家に父の実家がある新宮市まで行き、そこで一ヶ月半の夏休みを丸々過ごすことになる。それはわが家では、ごく当たり前の習慣だったのでいまだに夏になると熊野へ向かわずにはいられない。そのような同じ盛り上がりが赤ん坊の時からなされていたのであった。

一度など、新宮市から川を越えて三重県側に入り、海岸近くを走るドライブをしたことがある熊野市新鹿町に半年ほど暮らし、私や妹はそこの小学校に通っていた。考えてみれば、私自身がすでに”熊野人“だったのである。

私は電校から米国に留学し、以来十年以上を日本で暮らしていなかったのだが、休暇で帰国するたびに、熊野へ行った。那智勝浦町には、かつて父が社長として使い、熊野での本拠地にしていた古い マンションがある。そこには当時、中上健次という作家と、一人の人間として生涯を共にした、一人の女性がいた。その地にたどり着けた頃だった。私にとって熊野は、まさに、母なる存在であった。

今年注に向かってまっかりと口を開けたような洪水に打ち寄せる波の音。蛇行する巨大な川の音。たびに色を変えていく樹、清澄たる滝から流れる清涼な飛沫が作る水の世界。そして、深く深くにまで沈む静かな山の緑のさわめき。耳れかかる濃密なカーテンでふと聞こえる上ガニの声。苔むした石のひんやりとした感触。山と大地のイメージ。それらが、交互に現れては消え、配慮や、遠慮の迷路や、未来への期待や不安と混じりあい溶け合っていく。

眠りの最中にそんな映像に包まれる夜を、幾晩も過ごした。

夢に出てくる男は、わが父の故郷であるこの熊野だ。世界のどこにいようが、ひとたび眠りに陥れば、眠り通らされた盲目の男がそこにいる。そして、熱く濃い熊野への思いが溢れ出し私の夢を支配する。

この世に生を受けたその瞬間から、私は熊野のほうを向いてきたと思っている。幼い頃は潜在的にではあるにしろ、父が熊野を故郷とする人であることを誇りに思っていた。

父が熊野を故郷とする人であることを誇りに思っていた。

今でも熊野には、そこに人と新信あるいはそこに世界を見ている人がいる。好奇好きな私にとって、それが私の中の熊野のベース音になっている。

私たちの生業ようになったのはもう十年近く前になる。

当年時代に訪れたアジアの田舎に、私はこしようもないほどの感銘を受けた。文化や名所旧跡ももちろん興味深かったが、何よりも、土地の人々の旅人に対する素朴な応接ぶり。眼いっぱの命あるものを慈しむ心や祈りの風習が、それぞれの世界観を物語として体内に刻まれていったのだった。同時にある種の懐かしさが私を包んでいた。以来、取りつかれた様にアジアを旅するようになったのだが、ふと気づくと、熊野のことを思っている自分がそこにいた。ものを書くようになったのと、ノクノクと身体のどこかで波打つ熊野の存在をはっきりと意識するようになったのも、同時期のことである。

熊野というと、ただ、古来より”異界の熊野語“と呼ばれる独と り、人々を熊野へと行ける信仰の地だけあって、訪れる者に対して優しく重大なアジア的性質を持っている。

意原からもっとこころ清く、深い山々と海に囲まれて言葉や今もちょっとやそっとでは入り難いような土地であるにもかかわらず、熊野に外国からの客や観光者が多いのは、外からの者に対して圧倒的に開かれていないからではあるまいか。古くは熊野に集ってきまざまな民族がこの半島の密閉に流れ着いたはずで、修験上陸伝説などがあるのも、そういう風土ゆえであろう。

神様も異大である。一月に神倉山で行われる火祭りは、上り子になる人は男でなければ年齢、出身地、人種の制限はない。女性も祭りの側面から支えるという重大な役割を果たしている。何というでも山の神様は女性だ。それに、かつて熊野語にやってきた和歌山部が奉宮の近くで月のものが始まってしまい、泣く泣く参詣の途を諦めようとしたエピソードが、美貌に満ちた熊野が現れ、これを受け入れたという話もある。熊野の神は潔癖、不浄を嫌びはしない。それどころか、不浄の者、弱い者を守り救う神なのである。

何者をも拒まない土地の性格は、熊野は外の世界に対してもオープンだ。他所人々が出て行くのは当然の成り行きだった。ただ、ここは新宮に関して言えば、農業も漁業も難しい地形が、ちょっと前までは貧困から出稼ぎに行くのは当たり前のことだったが、その行く先は海外の町というよりは、北海道のような遠い場所だった。だから、港を離れてサンフランシスコやホノルルの口に乗せて移り住んだ者もいると聞いた。

遠く行くことに対して、この土地の人々にはさほど抵抗がなかったらしい。那智勝浦から漁船で沖合に出た十人くらいの漁師たちは、青い海の向こうにはきっと素晴らしいものが、輝く豊かさがあるものだと思っていた。この土地の人々の意識の中には、遠くへ行くことに対する憧れがあったのかもしれない。

意原というと、私の母は古座川の河口に近い、向こうに大島を眺め、そのたびに出れば”沖に出る”と言われた場所でもあるこの国を、”海の国”と言ってもいいのかもしれない。

熊野とは沙の青い海と、緑の山々が、ぴったりと寄り添う場所である。

熊野の中心地、新宮市から川を越えて三重県側に入り、海岸近くを走るドライブをしたことがある熊野市新鹿町に半年ほど暮らし、私や妹はそこの小学校に通っていた。考えてみれば、私自身がすでに”熊野人“だったのである。

私は電校から米国に留学し、以来十年以上を日本で暮らしていなかったのだが、休暇で帰国するたびに、熊野へ行った。那智勝浦町には、かつて父が社長として使い、熊野での本拠地にしていた古い マンションがある。そこには当時、中上健次という作家と、一人の人間として生涯を共にした、一人の女性がいた。その地にたどり着けた頃だった。私にとって熊野は、まさに、母なる存在であった。

今年注に向かってまっかりと口を開けたような洪水に打ち寄せる波の音。蛇行する巨大な川の音。たびに色を変えていく樹、清澄たる滝から流れる清涼な飛沫が作る水の世界。そして、深く深くにまで沈む静かな山の緑のさわめき。耳れかかる濃密なカーテンでふと聞こえる上ガニの声。苔むした石のひんやりとした感触。山と大地のイメージ。それらが、交互に現れては消え、配慮や、遠慮の迷路や、未来への期待や不安と混じりあい溶け合っていく。

眠りの最中にそんな映像に包まれる夜を、幾晩も過ごした。

夢に出てくる男は、わが父の故郷であるこの熊野だ。世界のどこにいようが、ひとたび眠りに陥れば、眠り通らされた盲目の男がそこにいる。そして、熱く濃い熊野への思いが溢れ出し私の夢を支配する。

この世に生を受けたその瞬間から、私は熊野のほうを向いてきたと思っている。幼い頃は潜在的にではあるにしろ、父が熊野を故郷とする人であることを誇りに思っていた。

父は八月の暑い日に熊野に帰郷ひきこもった。夏は新宮にある、さら、明年の父が中心となって建てた熊野大学が、毎年八月、多くの講師陣を招いて夏取講座のある高田で中上健次を三十十を開催する。夏は熊野にしかない……私にとってはそう信じられていたものだ。

この熊野大学を三十の百人近い講師陣はほとんど新宮からやって来るのだが、三日間は全部屋なる空間が山の中に出現する。熊野の自然と、作家や批評家である講師たち、そして聴講生、そのすべてが混じり合い溶け合ってこの地に、熱気に満ちた知的空間でもある。

父は八月の暑い日に熊野に帰郷ひきこもった。夏は新宮にある、さら、明年の父が中心となって建てた熊野大学が、毎年八月、多くの講師陣を招いて夏取講座のある高田で中上健次を三十十を開催する。夏は熊野にしかない……私にとってはそう信じられていたものだ。

この熊野大学を三十の百人近い講師陣はほとんど新宮からやって来るのだが、三日間は全部屋なる空間が山の中に出現する。熊野の自然と、作家や批評家である講師たち、そして聴講生、そのすべてが混じり合い溶け合ってこの地に、熱気に満ちた知的空間でもある。

父は八月の暑い日に熊野に帰郷ひきこもった。夏は新宮にある、さら、明年の父が中心となって建てた熊野大学が、毎年八月、多くの講師陣を招いて夏取講座のある高田で中上健次を三十十を開催する。夏は熊野にしかない……私にとってはそう信じられていたものだ。

この熊野大学を三十の百人近い講師陣はほとんど新宮からやって来るのだが、三日間は全部屋なる空間が山の中に出現する。熊野の自然と、作家や批評家である講師たち、そして聴講生、そのすべてが混じり合い溶け合ってこの地に、熱気に満ちた知的空間でもある。

父は八月の暑い日に熊野に帰郷ひきこもった。夏は新宮にある、さら、明年の父が中心となって建てた熊野大学が、毎年八月、多くの講師陣を招いて夏取講座のある高田で中上健次を三十十を開催する。夏は熊野にしかない……私にとってはそう信じられていたものだ。

この熊野大学を三十の百人近い講師陣はほとんど新宮からやって来るのだが、三日間は全部屋なる空間が山の中に出現する。熊野の自然と、作家や批評家である講師たち、そして聴講生、そのすべてが混じり合い溶け合ってこの地に、熱気に満ちた知的空間でもある。

中上 紀●ながかみのり
1963年、和歌山県生まれ。作家。東京大学教養学部卒業。アメリカ、アジア、南米などを放浪。帰国後、ジャーナリストとして活躍。『ハバナ』（集英社）で第20回すばる文学賞を受賞。『ヒロシマ・ノート』（集英社）、『ヒロシマ・ノート』（岩波書店）、『東京』（講談社）、『アジア遍歴』（岩波書店）、『ブエノスアイレス』（岩波書店）、『いつかあなたに出会うまで』（集英社）、『春の来る日』（河出書房新社）など。小説のほかに、ルポルタージュ、エッセイなども手がけ、数多くの著書がある。